



「生命の灯だけは消させたくない」。強い責務を胸に…

「まわりから何を言われても自分の道を通してきたその根性、そして、長い間、たくさんの『里の子』たちのために体を張ってきたおやじは、素直に尊敬できる」。

勤めていた福島県郡山市の会社を辞め、雄大な蔵王に抱かれた場所でのほど、両親の松鶴さん（70歳）・久子さん（69歳）と、この春で設立25周年を迎える「東北青少年自立援助センター 蔵王いこいの里」を、特定非営利活動法人として新たにスタートさせた岩川耕治さん。不登校、引きこもり、ニート、非行、暴力、

■特定非営利活動（NPO）法人
東北青少年自立援助センター「蔵王いこいの里」

岩川耕治さん（蔵王・34歳）
父・松鶴さん 母・久子さん

-Vol.2-

“時代の開拓者”受け継いで

心に傷を負った子どもたちの自立を援助。すべてを手放し、成し遂げたかった両親の想いを、最近ようやく理解できるようになった

社会生活不適応…。蔵王猿倉スキー場近くにある「蔵王いこいの里」では、実にさまざまな苦悩を抱え、心に深い傷を負った人々を受け入れ、自立や就労を援助しています。これまで入寮し旅立っていった、いわゆる『里の子』は小学校高学年から40歳位までの約五百人。その大半が県外からで、現在は、15歳から35歳までの男女6人が、親元を離れ一つ屋根の下で共同生活を営んでいます。

もともと東京都内の公立中学校教師として、主に非行生徒の指導を担当していた松鶴さんと、不登校傾向の生徒が通う情緒障害児学級を受け持っていた久子さん。その頃、非行や不登校が原因で離婚や家庭崩壊、ひどい時には、自殺にまで至る社会現象が急増。生徒の親からも苦しい胸の内を聞かされ、「生命の灯だけは消させたくない」と、強い責務と不安感に襲われた。コンクリートに覆われた学校で、1日数時間接するだけの方法に限界を感じていた。子どもともっと密着した生活の形や場所はないものか、大自然の中での生活にこそ解決の糸口があるのでは…。

それまで、教師仲間と何度も蔵王を訪れていた両親は、四季折々の自然の豊かさに魅かれ、常宿だった山荘を買取り、二十数年勤めた教員生活にピリオドを打ち、山荘業を営みながら『里の子』を受け入れることを決意。昭和58年、耕治さんを含む3人の子どもを連れ、家族で上山市に移り住んだのです。

厳しい現実に向かい、カタチになった「自立援助」

長年勤務した教師という身分、自宅などすべてを手放し、退職金や預貯金などを準備資金に充てたほか、我が子の将来や家庭の経済的不安が募る中、両親にとつてこの決断は危険な賭けでした。初めての山荘業に戸惑う日々。また当時は、前例も少なく地元にも不登校そのものへの理解や知識が乏しかったり、「問題児を集めた商売だ」などと誹謗中傷されたり、現実には厳しいものでした。

里では、食事の配膳や後片付け、清掃、あいさつの仕方などごく日常的なことから、野菜づくりなどの農作業体験、冬は資格取得を目指したスキー実習など、さまざまな活動が行われています。長年、不規則な生活を送ってきたり人との関わりを持たなかったりした人たちに、日常の暮らしを取り戻させるのは至難の業。心を開かせるために根気よく話しかけ、細かいことを何度も繰り返して教えます。ときに無断で里を抜け出す人がいれば、夜な夜な捜しまわることもしばしばです。スタッフが少ないため24時間365日休みがなく、また保護者の費用負担だけでは運営が厳しいのも現実。しかし、両親のこうした苦勞と努力の積み重ねで、『里の子』の約七割が現在、就学や就労などをして自立の道を歩んでいます。

※引きこもり…さまざまな要因により社会的な参加の場面が狭まり、就労や就職などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態

◎特定非営利活動法人 東北青少年自立援助センター「蔵王いこいの里」
〒999-3114 上山市永野字蔵王山2561-1 ☎679-4005
ホームページ http://www12.ocn.ne.jp/~echoikoi/

「自分が変わるしかない」 とある少女の『旅立ちの春』

「『里の子』が抱える問題の原因のほとんどは、親子関係にある。親は、厳しくも賢い『先を見通した』愛情を持つべき。また、親の悩みや困惑に対し、客観的に側面から援助、助言できる力と場、そして、子どもを見つめ見守る眼の多さと深さが必要。里は、地域の多くのみなさんの『真綿のような』心に支えられてきた」。

久子さんの言葉どおり、全員の散髪を引き受け、いろんなことを飽きずに説いてくれる理容師さんや、たくさんの果物を届けてくれる農家がいたほか、『里の子』が地元中学校へ通ったときには、先生や同級生が温かく迎えてくれたり、地域のみなさんが帰りのバス時間まで家に寄せてくれ、ときに里まで送ってくれたりしたこともありました。

「何より『里の子』から学んでここまで活動を続けて来られた」と久子さん。取材を通してある女子中学生（15歳）に出会いました。都内の学校に通っていた彼女は、友だち関係がこじれ不登校になったことなどが原因で、家庭内でも両親と取っ組み合いの日々。次第に家に帰らなくなっていました。訳も分からず、両親から里に連れて来られたのが1年半前。「何でわたしが変わらなくちゃいけないの？って思ってた」と、当時は涙ながらに振り返ります。しか

し「将来のために、自分が変わるしかない」と思い始め、いじめや友だち関係に対するさまざまな不安が彼女を襲う中、地元中学校にも通学。時間をかけて慣れていくと、まわりも受け入れてくれ、『自分でいられる』友だちがたくさんでき、毎日が楽しくなっていくと、いいます。

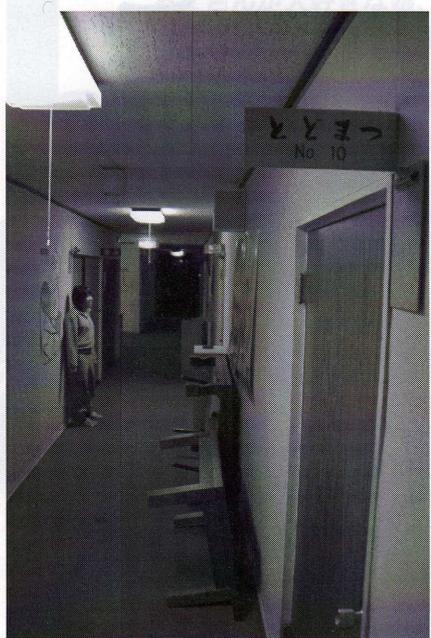
また岩川さん一家について、「自分のために、時に本気で怒り、時にほめてくれる。わたしにとって『第二の家族』と、照れくさそうに話します。「あの時は両親も苦しかったんだな、両親がいて良かったなって、今になって気付くことがたくさんある。今まで親不孝だったから、なるべく困らせないようにしないと」。そんな彼女はこの春、地元中学校を卒業し、親元へ戻り都内にある高校の保育科に進学します。「将来、子どもと対等に向き合える、優しい保育士になりたい」。彼女の飾らない言葉が印象的でした。

「助けを求めている人のため、 今度は自分が動かねば…」

もう一人、7年間、里で過ごした22歳の青年も親元に戻り進学するなど、ようやく雪が融けはじめた里にとって、今年嬉しい春になりました。「今後の一步をどう踏み出すか自力で考えられるようになり、失われていたかもしれない命や家族が息を吹き返す。この仕事に勝るものはない（久子さん）」。「何をしても



▶採れたて「山ぶどう」の選定作業。その後、つぶして砂糖・はちみつを加えたジャムは、パンにつけたりヨーグルトに入れたり、『里の子』たちも大好物



◀「蔵王いこいの里」では2人1部屋で共同生活。青少年の自立援助に対する需要は、年々増加傾向にある

うまくいかず、何かに無我夢中で取り組むことがなかった子どもたちが、たかが農作業やスキーでも、懸命に汗を流して瞳を輝かせて活動している姿は美しい（松鶴さん）。

耕治さんは、松鶴さんに跡を継ぐように言われたことは一度もないそうですが、「安定した教員生活を捨ててまで成し遂げたかった両親の想いを、最近ようやく理解できるようになった」と話します。また、「両親が築き上げたことを無駄にせず、助けを必要としている人たちのために、今度は自分が動かなければ」。里では、新たに家庭訪問相談を始めたほか、今後は稲作実習や就労のための技術習得、さらに地域と連携し、小学生との交流、福祉施設への労働ボランティア体験、企業でのアルバイト推進など、徐々に活動の幅を広げようとしています。

「息子夫婦もある意味、時代の開拓者。継いでくれるのは嬉しい反面、苦労してきただけに、同じ思いをさせるのは…。無理をせず、地道にコツコツやっていたらそれだけで十分じゃないか。そう話して席を立った松鶴さんの背中を、窓から差し込むやわらかな春の光が優しく照らしていました。」